

<原著>

「在日朝鮮人一世としての作家・立原正秋」(2)
—小説「ある父子」を通して—

綴谷 智雄

Author TATIHARA Masaaki as the Korean resident in Japan First Generation (2)
-Through a novel “A father and son” -

KASETANI Tomoo

1948 is a special year for TATIHARA Masaaki. He got married to a Japanese woman and entered her family register with first son birth in same year July, and his name on the family register became YONEMOTO Masaaki. “YONEMOTO Masaaki” wrote a novel “A father and son” using his ethnic name Kim Yun Gyu.

Why “Japanese YONEMOTO Masaaki” wrote the novel using the name Kim Yun Gyu?

That was to draw the real state of affairs of the colony Korea that he experienced, and to confirm the starting point of himself.

That was the “rite of passage” for him.

Key words : colony control by Japan, ethnic identity, Korean resident in Japan First Generation

日本による植民地支配、民族意識（エスニック・アイデンティティ）、在日朝鮮人一世

1. はじめに

前稿では、主に1960年代～70年代に執筆活動を行った作家である立原正秋（たちはらまさあき：1926-1980）の生い立ちと6つの名前の変遷をふりかえり、作品（「剣ヶ崎」と詩（「言祝ぎの日」にこめられた思いから、在日朝鮮人一世¹⁾）としての彼の民族意識の一端に接近しようと試みた。

本稿では、立原正秋が民族名の金胤奎（キム ユンギユ）で執筆・発表した小説「ある父子」を通して、彼の民族意識に、さらに接近していきたい。

2. 接近方法

本稿では、小説「ある父子」に描かれた朝鮮人と日本人の関係、朝鮮人に関する記述、日本人に関する記述などから、作者・立原正秋の民族意識をさぐることを試みる。

考察においては、植民地時代における朝鮮総督府の統計資料やその他文献なども参考資料として活用する。

3. 小説「ある父子」

「ある父子」は、1948年に書きあげられ、『自

由朝鮮』3巻1号(1949年)に掲載された小説だ。『自由朝鮮』は、編集者、版元、広告主などがいずれも在日朝鮮人によって担われてきた雑誌であり、アナキスト、転向マルクス主義者などの日本人寄稿者も少なくなかった²⁾。

前稿で述べたように、1948年は立原正秋にとって、特別な意味を持つ年である。同年7月、長男誕生にともない、彼は日本人である米本光代との婚姻を通して彼女の戸籍に入ることにより、戸籍上の名前が「米本正秋」となる。そして8月には、彼が生まれ育った朝鮮半島の南半分が大韓民国が樹立し、9月には北半分に朝鮮民主主義人民共和国が樹立し、南北分断が決定的になる。

そして、これに先立つ2年前(1946年)に彼は、早稲田大学文学部の聴講生となり、同大文学研究会の短編小説コンクールで一等を獲得している。

このような状況において、「日本人・米本正秋」となった立原正秋が、生まれ故郷に「帰郷」「帰国」して定住生活を行う可能性は皆無だったと、筆者は断言する。

長男誕生に際して彼が詠んだ詩「言祝ぎ(ことほぎ)の日」が、単に「息子を得た喜びにあふれた詩」にとどまらず、自らの人生における根本的な精神的支柱を詠んだものとして解釈できることを、筆者は前稿で指摘した³⁾。

この「言祝ぎの日」が書かれたのは1948年夏だった⁴⁾。それから数か月後(同年秋)に「米本正秋」は、民族名の金胤奎(キム ユンギュ)で小説「ある父子」を執筆している。故郷である朝鮮半島に帰らずに日本での定住を完全に決意した彼が民族名で書いたこの小説は、どのようなものだったのだろうか。

にんげんのすむくにかが ひとむかしたのくのにの
にんげんにあらされた

たべるものもちさらされ きるものはぎとられ
すむところうばわれて かくこともとだえられ
よむことをきんぜられ まなぶことうばわれて
たべたくもあわもなく つけたくもめんはなく
すみたくもこやはなし
よみたくもほんはなし かきたくもかみもなく
かなしくもみなほろぶ
おほらかなにんげんは それでなおいきていた
くさをかみいきていた
よむものはくびきられ かくものもくびきられ
にんげんがころされた
はらうえてたふるもの みのごごえたふるもの
ととしにかずふえて
めしくれとさけぶもの ほんくれとさけぶもの
このすべてころされた⁴⁾

「ある父子」は、このような詩が冒頭に置かれおり、それに続いて物語が始まる。

主人公である李光植・達浩父子は、日本人が所有する山で木を伐り、生計を維持している。足の不自由な父・光植は、朝鮮人であり身体障害者であることを理由として不当な嘲りを受けながらも、誠実に働き続けているが、彼が得る報酬は「なしとげた労力など到底及ばない安い賃金」にすぎず、「働かなければその日の夕飯が喰えない」ぎりぎりの生活を強いられている⁵⁾。

ここで、冒頭の詩の意味が強烈に伝わってくる。

にんげんのすむくにかが ひとむかしたのくのにの
にんげんにあらされた
(人間の住む国が、ひと昔、他の国の人間に荒らされた)

すなわち、朝鮮が日本によって植民地化され、朝鮮人が日本人によって搾取されるという支配-被支配の構造が、明確に浮かび上がってくる。

この構造について小説では、次のように詳細に記述されている。

うすぼんやりとではあったが、達浩は自分の住んでいる社会全体が、日本人によって運営されており、さからう者は破滅するということを知った。百姓は自分の作った米が食えず、麦や粟ばかりが与えられ、もし作った米を全部供出しないで多少とも隠蔽している疑いがあると、早速面事務所（引用者注：「面」は、当時の地域行政地区の単位）から若い役人が現れ家宅搜索をやる。これに立ち会って少しでもさからいの言葉を述べたが最後、老いた農夫は若い役人に頬を打たれる。役人は大概、日本人に使はれている普通学校出身位の朝鮮人で、なんの批判力も持ち合はせていない者ばかりだ。自国の百姓を搾取する、日本人を手伝う。悲しいことではあるが、こういう例は事実だった⁶⁾。

ここでは、植民地朝鮮における支配者である日本人たちが、自分たちの「手先」として一部の朝鮮人たちを利用して実態が活写されている。

この構造が当時、少年たちの世界にも浸透していたことが、達浩の母が罵倒される場面からうかがうことができる。

彼女に「うるせいや、婆ァ！朝鮮！てめえんとこの奴はどろぼうだぞ」と叫ぶのは警察署長（日本人）の息子で、「婆ァ！てめえんとこの豚小屋みたいな家をいまにぶっこわしてやんからな」と追い打ちをかけるのは、日本人が経営する旅館の息子であり、それに「あんなボロ屋、すぐこわせらなあ！」と追隨するのが、警察署の朝鮮人巡査部長の息子である⁷⁾。日本が植民地支配する朝鮮で1926年に生まれ、11歳まで当地で生活していた立原正秋だからこそ、支配者である日本人とそれに

追隨する一部の朝鮮人、そして支配され搾取される朝鮮人たちの実情を活写できたのではないかと、筆者は考える。

4. 当時の社会構造と「父と子」

〈表〉日本人と朝鮮人の職業別人口分布(1942年現在)
単位：人

職種	日本人	朝鮮人
農林水産業	38,309 (5.1%)	17,901,971 (70.1%)
鉱工業	164,326 (21.8%)	1,708,900 (6.7%)
商・交通業	190,675 (25.3%)	2,098,616 (8.2%)
公務自由業	297,233 (39.5%)	1,007,360 (3.9%)
その他	32,650 (4.3%)	2,266,404 (8.9%)
無職	29,630 (3.9%)	542,158 (2.1%)
計	752,823 (100.0%)	25,525,409 (100.0%)

出典：『朝鮮総督府統計年報』1942年度版、28-35より作成。

ここで植民地朝鮮における日本人と朝鮮人の職業別人口分布を概観してみよう。〈表〉が示すように、朝鮮人の7割以上が農林水産業に従事している一方で、日本人は「公務自由業」に従事する者の割合が高い。

「ある父子」において、林業に従事する主人公（李光植）の妻に「うるせいや、婆ァ！朝鮮！」と叫ぶのは、「公務自由業」に従事する日本人（警察署長）の息子である。また、比率は小さいものの、人口的には100万人を超えていた朝鮮人の「公務自由業」従事者たちの中には、「ある父子」で言及されている、老いた農夫の頬を打つ「若い役人」や、日本人の暴言に追隨して、「あんなボロ屋、すぐこわせらなあ！」と叫ぶ朝鮮人少年の父である「朝鮮人巡査部長」などが、相当に含まれていたのではないかと筆者は想像する。

前述のように、嘲られ搾取されながらもなんとか生き続けてきた李光植は、不自由な体

で長年過酷な労働を続けてきたことにより、病床に伏すことになる。そして彼は、経済的事情から十分な治療を受けることもできないまま、衰弱して絶命する。

死を間近にした李光植の姿を、作者は息子である達浩の目を通して、次のように描いている。

そこには、ながい間、搾取され通しの一人の朝鮮人の最後のありさまが、はつきり表現されていた。学ぶことを禁ぜられ、住むところをうばはれ、喰うものも着るものも持ちさられ、そうされたことによつて一つの宿命観を植えつけられ、牛の如くのろのろと激しい労働を強制されて亡びゆく朝鮮人の縮図が、さからえば、またそれなりに、手段をえられない日本人の残虐性の下に亡びてゆく朝鮮人の縮図が、一人の過剰労働をして倒れた樵夫によって表現されていた⁸⁾。

5. 被植民者の記録としての「父と子」

前稿で述べたように、立原正秋は1960年代から70年代にかけて華々しい文筆活動を展開し、作品のいくつかはテレビドラマ化・映画化され、話題となった。しかしこれらの作品は、主として現代日本社会における男女を描いたものであり、植民地時代の朝鮮を生きる庶民の姿は描かれていない⁹⁾。

前稿でもとりあげた小説「剣ヶ崎」(1965年発表)においては、彼が11歳(1937年)に朝鮮から日本に渡り、新生活を送ることになった神奈川県三浦半島を主舞台として、主人公である日朝混血の兄弟に、「俺は日本人を憎み朝鮮人を憎み、日本人を愛し朝鮮人を愛してきた。俺のなかでは、圧迫者と被圧迫者の血が平行して流れ、いつまでたっても終わりのない葛藤を続けている」と語らせてお

り¹⁰⁾、「日本人にも溶けこめず、朝鮮人にも溶けこめず、絶えず宙ぶらりんの形で日々を生きて行かなければならなかったのです」¹¹⁾と、「日本人でもなく、本国の朝鮮人とも異なる」という、在日朝鮮人の一面を活写している。また、「島国根性というのがあります。それが私を受けいれてくれないわけです。私は、人からきかれれば、何分の一かは朝鮮の血が入っていると答えます。そうすると、相手の態度が目に見えない速度で変わって行き、よそよそしくなっていくのです。理屈では割り切れない日本人の血、不思議な民族の血がそうさせるわけです」¹²⁾と、日本社会(日本人)の排他性・排外性を指摘する場面も描かれている。周知のとおり、在日朝鮮人の存在は、日本による朝鮮の植民地支配に起因するが、この作品においては、植民地支配下で困窮する庶民の姿は描かれていない。

これらを考慮すると、立原正秋が民族名の金胤奎で執筆・発表した小説「ある父子」は、きわめて特別な意味を持つ作品だと考えられる。

ではその意味とはどのようなものなのか。筆者はそれを、「植民地朝鮮で生まれ育った金胤奎という朝鮮人として、被植民者としての記録を残す」という、彼にとっての一種の通過儀礼であったと考える。

前稿で述べたように、植民地朝鮮において金胤奎(キム ユンギョ)として生まれ育った彼は、11歳で渡日した翌年(1938年)、「野村震太郎(のむら しんたろう)」と名乗る。これは、母の再婚相手である王命允(ワンミョンユン)の通名(日本名)が「野村辰三」だったためだと考えられる。1939年、「野村震太郎」は横須賀商業学校に「金胤奎(きん いんけい)」と名乗って入学する。これについて高井有一は、「商業学校は戸籍の記載通りの名を名乗らせる方針を採つてみたのであ

らう」¹³⁾と、推測している。その後、いわゆる「創氏改名」(朝鮮人に日本風の名前を名乗らせるという政策)によって、1940年に金胤奎は「金井正秋(かない まさあき)」と名乗るようになる。そして1948年7月、前述のように長男を授かった彼は、日本人女性との婚姻を通して彼女の戸籍に入り、「米本正秋(よねもと まさあき)」となる。その3年後(1951年)、米本正秋は「立原正秋」の筆名で短編小説「晩夏 或は別れの曲」を発表し、その後、立原姓を日常生活においても使用するようになる。彼は1980年に戸籍上の姓を「米本」から「立原」へと改姓し、その二ヶ月後に立原正秋は死去する。

金胤奎(キム ユンギュ) → 野村震太郎 → 金胤奎(きん いんけい) → 金井正秋 → 米本正秋 → 立原正秋という、6つの名前を生きた彼が、「米本正秋」となった直後に、金胤奎という民族名で、植民地朝鮮における民衆の惨状を描いたことを、筆者は次のように解釈する。

長男の誕生と入籍は、彼にとっては「日本人」としての再出発だった。1910年の「日韓併合」ともない、朝鮮人たちは「大日本帝国臣民」として、強制的に「日本国籍」を持たされた。当時の戸籍制度では、植民地の民である朝鮮人は、日本国内の「内地戸籍」とは別の「朝鮮戸籍」に登録された。そして日本の敗戦後、1947年に最後の勅命として出された「外国人登録令」により、「朝鮮戸籍」に登録されていた朝鮮人たちは、「日本国籍」を所有する「日本人」であるにもかかわらず、「外国人」として登録されることになる。そして日本が主権を回復した直後(1952年)、日本政府は在日朝鮮人の日本国籍を一方的に抹消する。

1948年、妻の戸籍に入籍する前の「金井正秋」は、日本国籍者であるにもかかわらず、

朝鮮人であるという理由で「外国人登録」させられるという、矛盾に満ちた社会的立場に置かれていた。そして彼は、婚姻を通して妻の戸籍に入ることにより、「外国人登録」の軛(くびき)から解放され、「日本人」として再出発することになる。

前述したように、長男誕生に際して彼が詠んだ詩「言祝ぎ(ことほぎ)の日」は、単に「息子を得た喜びにあふれた詩」とどまらず、自らの人生における根本的な精神的支柱を詠んだものとして解釈できる。しかし、長男誕生・婚姻・入籍にともなって「米本正秋」となった彼が民族的葛藤を経ずして、「日本人」としての再出発を迎えたとは、筆者には到底考えられない。それは、先に述べた小説「剣ヶ崎」を一読するだけで、明らかだ。

「日本人米本正秋」が、金胤奎という民族名で「ある父子」を執筆・発表することは、自らが金胤奎という朝鮮人として生まれ育ち、日本に渡る11歳までに体験・見聞きしてきた、植民地朝鮮の実情を記録することであり、それは「被植民者」であった自分の原点を確認し、記録することであった。

自分はこれから、「米本正秋」という「日本人」として日本で生きていく。しかし自分の原点は朝鮮半島にある。そこで自分が経験したこと、見聞きしたこと、それらを「なかったこと」にしたままでは、新たな一歩は決して踏み出せないと、彼は考えたのではないだろうか。すなわち彼にとって、民族名・金胤奎で「ある父子」を執筆・発表することは、自らに課した「通過儀礼」だったのではないだろうか。この「通過儀礼」を経ずして、朝鮮人・金胤奎として生まれ育った彼が「米本正秋」という「日本人」として再出発することは、決してありえなかったと筆者は考える。

6. おわりに

ここまで、小説「ある父子」を通して、在日朝鮮人一世としての作家・立原正秋の民族意識に迫ろうと試みてきた。「ある父子」は、日本における植民地支配の実態を活写している点においても、立原正秋の民族意識に接近できるという点においても、極めて重要な意味を持つ小説だといえよう。

立原正秋と同時期に植民地朝鮮で生活していた作家として、小林勝（1927-1971）を挙げることができる。被植民者であった立原正秋とは対照的に、日本人植民者の息子として朝鮮南西部で生まれ育った彼は、日本の敗戦後、帰国して作家活動を展開する。小林勝の小説には、植民者としての実体験に基づき、自らを省察する視点から描かれたものが多く、「支配者日本人と被支配者朝鮮人」という構造が、日本の敗戦によって崩壊する様子を活写した作品もある。

今回は小林勝の作品を取り上げ、立原正秋との比較を通して、植民者の視点と被植民者の視点の差異などについて、考察を進めていきたい。

引用文献・註

- 1) 筆者は、日本で定住・永住することになった朝鮮半島(済州島なども含む)にルーツを持つ人たちを総称して「在日朝鮮人」と表記する。その中には、朝鮮籍、韓国籍、日本籍の人たちが含まれている。
- 2) 山本武利他編：占領期雑誌資料大系 文学編Ⅳ第4巻、124、岩波書店、2010
- 3) 総谷智雄：在日朝鮮人一世としての作家・立原正秋（1）、神戸医療福祉大学紀要、第15巻第1号、22、2014
- 4) 山本武利他編：前掲書、125

- 5) 同上書、132
- 6) 同上書、132
- 7) 同上書、131
- 8) 同上書、138
- 9) 自伝的作品『冬のかたみに』（1975）からは、植民地時代における朝鮮人庶民の生活を、ある程度うかがうことができる。
- 10) 立原正秋：剣ヶ崎・白い罌粟、92、新潮社（新潮文庫）、1971
- 11) 同上書、125-126
- 12) 同上書、141
- 13) 高井有一：立原正秋、新潮社、66、1991